

国際交流活動実施報告書

プロジェクト名	彫刻学科国際交流 2023 オアハカ		
期間	2023年10月24日(火)～11月3日(金) (10/24 現地着、11/1 現地発)		
場所	オアハカ(メキシコ)	現地コーディネーター	筒井美佐代氏 Venancio Velasco González 氏
参加者	学部4年：シイ シュウショウエン 先生佳蓮 田所和真 ヨウメイラン リンコーウェイ 大学院：ジョショウケイ 菅原陸 マチェンルー ヨウタク 引率：高嶺格教授 水谷珠美助手		
概要・背景	<p>世界各国の都市でグローバル化による文化の均質化が進み、伝統や地域の特色が失われつつある現在も、オアハカには独自の文化が色濃く息づいている。メキシコ国内には約70もの先住民がいると言われているが、なかでも南部に位置する都市であるオアハカは住民の約4割が先住民族で、サポテコやミステコなど19の民族が独自のコミュニティを形成して生活を送っている。これを背景として各地域に根付いたものづくりの文化が生活の一部となっており、民衆の生活に根付いた芸術活動が見出される。</p> <p>以上を背景に、本国際交流活動の参加学生には次のことが期待される。</p> <ul style="list-style-type: none">○生活と結びついた民衆の芸術を見聞し、その担い手である生活者＝芸術家と交流すること。○その経験を通じて、伝統と多様性をキーワードに、自身の芸術実践のあり方を内省し、再考すること。		
報告	<p>■10月25日(水)～27日(金)</p> <p>各種制作体験を通してオアハカの文化・芸術を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none">・伝統料理モーレ・木版画・木彫オブジェへの色付け <p>■10月28日(土)、29日(日)</p> <p>オアハカの歴史的・地理的背景を学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none">・遺跡：モンテアルバン・ミトラ・景勝地：イエベルアグア <p>オアハカの先住民族のくらしを学ぶ</p> <ul style="list-style-type: none">・トルコロラ：地域住民が集まる日曜青空市・オコトランモレロス：動物市場・サンバルトロコヨテベック：黒い陶器の村・テオティトラン：毛織物の村 <p>■10月30日(月)、31日(火)</p> <p>伝統行事「死者の日」について学び、参加する</p> <p>■11月1日(水)</p> <p>総括：各自の気づき・学びを発表</p> <p>学生からは主に、この研修旅行で見聞き、経験して最も驚いたことを中心に発表。それについて、2007年以来オアハカに在住の版画作家筒井氏と、地元の同じく版画作家 González 氏にコメントや解説をしていただいた。</p>		

市民による市民のための芸術 - 木版画と街頭巨大壁画 -



オアハカには旧市街内だけでも 30 もの版画工房が存在する。材料が安価で複製可能な表現手段として先住民の学生に木版画の技術を教えたのは 1963 年以来メキシコ在住の日本人芸術家竹田鎮三郎氏。2006 年州政府への大規模抗議運動時に氏の教え子らが中心となってアートコレクティブ ASARO を結成。ASARO はアートを通じて民衆と対話し、社会の変革を行なうことを目的に、版画を街頭に貼ったほか、デモの旗やポスターを制作した。その後工房を構え、教育の機会に恵まれない子供達や女性達へワークショップを行った。以来多数の版画工房が誕生したそうだ。

写真 1-4：
ASARO 初期中心人物
マリオ・グスマンが
立ち上げた版画工房
Subterraneos にて
版画制作のワーク
ショップに参加。

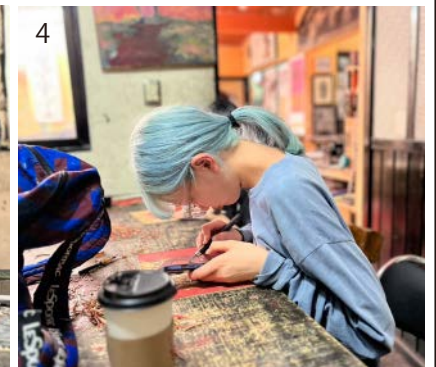


写真 5：Subterraneos のアーティストたちが夜に作品を街路壁面に貼りに行くのに特別に同行させて頂いた。障子紙のような薄紙に刷った巨大版画を、小麦粉を水で溶いて煮詰めた糊で外壁に貼り付け。チームワークであっという間に巨大壁画が完成する。動画や写真等の撮影をしつつ見守る私たち。通りすがりの観光客も立ち止まって見学していった。

写真 6-8：彼らに倣って私たちが次々と自分の作品を壁面に貼り付けていった。



写真 9：貼り付け完成。

なりわいとアイデンティティ - 稼業と芸術家としての表現活動 -

職人の村に生まれれば職人に、親が市場で働く人ならばその店を継ぎ、など家業を継ぐ人々。あるいは命懸けでアメリカへ渡り、家族へ仕送りを続ける人々。このような人々の話を多く耳にした。

揺るぎないアイデンティティを持って、誇り高く意欲的に家業を発展させる職人たちに出会った一方で、生まれによって将来が決定してしまうことによって、将来について希望を持っていないという思いを経験する人もいた。教育の機会に恵まれないことで将来について、より合理的な選択肢を検討する機会も余裕もない人々もいると聞いた。

市場でチャプリン(パッタの佃煮)売りの家業を行いつつ、店の2階に建て増したスタジオで自分の創作に励む若いアーティスト。独学で身につけた流暢な英会話を駆使し、観光客にモダンなデザインで工夫した伝統織物を軽やかに売る職人兄弟。市街から遠く離れた木彫民芸の村で作品を売るかわら色付け体験のワークショップを行う家族。

出会った人々はみな、家族思いで人柄は暖かく、そして生きていくことにおいて心身ともにたくましかった。生まれや家業に誇りをもって自分の揺るぎないアイデンティティの一部とする気概にその強さを感じた。



写真10：オアハカ市街より車で1時間ほど離れた山中にあるティルカヘテは木彫職人の村。動物モチーフにメキシコらしいカラフルな色付けがされているのが特徴。半日ワークショップでは色付けを行った。



写真11,12：毛織物の村テオティトラン。カラフルでおしゃれなこの店は雑誌 Casa BRUTUS のメキシコ特集に掲載されたそう。



写真13：オアハカ最大の市場アバストスにて家業のチャプリン売りを担うアーティストの Ángel cortes 氏。

写真14,15：店の2階に構えたスタジオスペースで制作中の作品を紹介してくれた。この絵画作品は市場の食堂のテーブルクロスモチーフにしており、人々が食事集まって噂話に興じる様子を連想させる作品となっている。





受け継がれる伝統的食文化の誇り

写真 16-19：日曜日の日中にだけ開催されるトルコロラ市場。観光客はほぼおらず、地元の人々が多く集まるこの市場では食材も調理方法もユニークな品々が数多く見られた。写真はカカオを発酵させた飲料、サトウキビ、炭火で焼くトルティーヤ、豪快にさばかれ吊るされて販売される牛肉。羊の内臓を使った辛いスープも名物だそう。

写真 20-23：伝統料理モーレづくりを学び、実食した。多種多様なスパイスを炭火でじっくりと炒り、それらをミキサー専門店で持ち込んでペースト状にする。それらをまた家へ持ち帰り、鍋でじっくりと炊き合わせるとできあがり。メキシコ料理に欠かせない3大要素はとうもろこし・とうがらし・豆とのこと。調理法や食材などの説明から、多くの人が自分たちの食文化に深い思い入れや愛着を持っていることが伝わってきた。



歴史に育まれた信仰と精神性と 観光化する伝統祭礼行事



写真 24, 25：順にモンテ・アルバン（ピラミッド形状だが墓ではなく祭祀センターで、BC 5-8 世紀に栄えた）と、ミトラ遺跡（紀元後 1000-1200 年頃栄えたとされる祭祀センター）。

先祖を敬う、死後の世界を信じる、など見えない世界を大切に扱う精神性はマヤ、アステカなどの古代文明から引き継がれる歴史を背景に、今も一般市民の生活に受け継がれ独特の文化を形成・維持している。それは物質的な現代社会とは異なる魅力となって世界各地から観光客を惹きつけてもいる。中でも「死者の日」は最大のイベントだ。年に一度、故人の魂を迎えるこの行事は本来、親戚や家族が集まって墓場に夜通し明かりを灯し、故人に思いを馳せる親密なものであった。それがハロウィンパーティーと結びついたり、墓場の生花や蝋燭による飾り付けが華やかで観光客の目を喜ばせるものであったことから年々、観光イベント化もしている。



写真 26, 29：オアハカ旧市街では各所で「死者の日」に合わせて様々なイベントが行われた。音楽の生演奏とダンスと花火で盛り上がる広場の様子。世界各国の観光客が集まりすし詰め状態。

写真 27, 28：ハロウィンパレードで見事な仮装をする人と記念撮影。

写真 30, 31：私たちが「死者のメイク」をし、現地の伝統衣装を身に纏って街へ繰り出した。メイクは露天やショップでわずか 10-20 分、2000 円程度で施してもらえらる。

写真 32：大音量で生バンドのコンサートの夜通し行われているここは何と墓地。故人の好きな曲をギターで演奏するという習慣が、観光客向けにこのようなバンドイベントに転換されたそう。本来の「死者の日」の過ごし方である、墓を囲んで静かに寄り添う家族の様子は印象的だった。

